

演劇的手法を用いた授業実践の教育的有効性を認識するための予備的研究

How the drama method works for students in care class:
A preliminary study on the value of its educational practice

市原 浩美¹, 川廷 宗之²

¹大妻女子大学大学院人間文化研究科, ²大妻女子大学人間関係学部人間福祉学科

Hiroimi Ichihara¹ and Motoyuki Kawatei²

¹Graduate School of Studies in Human Culture, Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

²Faculty of Human Relations, Otsuma Women's University

2-7-1 Karakida, Tama City, Tokyo, Japan 206-8540

キーワード：介護福祉士養成，実習事後指導，介護実習劇

Key words : Care Worker Training, Reflection After Practice, Care Practice Play

抄録

専門学校で事後指導として13年間試みた「介護実習劇」が、最終実習の振り返りにどのような効果を及ぼしたかを検証するため、卒業生へのインタビュー調査を実施した。発言内容を質的に分析した結果、【32概念】から最終的に3つのコア・カテゴリー「制作過程」「劇中場面」「劇発表」が生成され、「介護実習劇」を活用した事後指導は、「制作過程における仲間の視点」「劇中場面における登場人物たちの視点」「劇発表での先輩・後輩の視点」の相互作用によって、多角的な実習の振り返りを可能にしていることがわかった。今後は3つの視点に着目して台本分析を進めるとともに、演劇を用いた教育としての「介護実習劇」の位置づけを明らかにしていくという課題が示唆された。

1. 研究目的

介護福祉士養成課程の現行カリキュラム（H21に改正）では、理論と実践を融合することを見直しの背景とし、教育体系が「人間と社会」「介護」「こころとからだのしくみ」の3領域に再編成された^[1]。座学（「人間と社会」「こころとからだのしくみ」と演習科目（「介護」）を実習で結びつけることが「求められる介護福祉士像」^[2]の形成に必要とされているにもかかわらず、実習を振り返る際に座学と演習科目をいかに統合し学生指導を行うかに着目した研究は少なく、また実習事後指導の方法として演劇的手法を活用した例はほとんどみられない。

そこで本研究では、A専門学校で13年間試みた「介護実習劇」^[3]を理論的に整理し、演劇的手法を活用した実習事後指導の有効性を検証することを目的に、その予備的研究として、卒業生へのインタビュー調査を行った。実習初日から最終日までの実習生の成長を主題にした「介護実習劇」制

作が卒業生に与えた影響を探ることで、演劇のどのような性質が介護実習の振り返りに役立つのかを考察する手がかりを得ることが可能となった。本稿では、卒業生へのインタビュー調査の結果を報告すると共に、今後、理論と実践の統合に着目して台本分析を行っていく際の指針を明らかにする。

2. 研究方法

調査時期：2013年6月～2014年3月

対象者：A専門学校を2006年度～2012年度に卒業した学生で介護福祉科2年時に介護実習劇を経験した者。そのうち現在介護福祉士として現場で働いている者で、研究参加の同意を得られた20名。

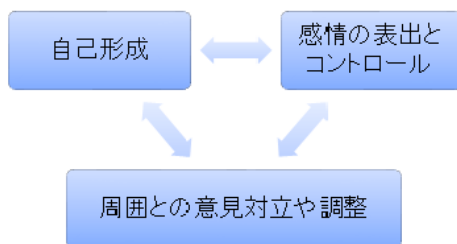
調査方法：半構造化インタビュー（30分～1時間）。質問項目は①介護実習劇を経験して印象に残ったこと②介護福祉士として学びに活かされたことについて自由に回答してもらった。

倫理的配慮・分析方法：面接の内容は個人が特定されないよう十分配慮し，研究目的以外では使用しないことを明確に説明し了解を得た．発言は許可を得て録音し，逐語録を起し質的に分析，データは切片化せず，発言のまとまりから内容のつながりや流れを解釈した．

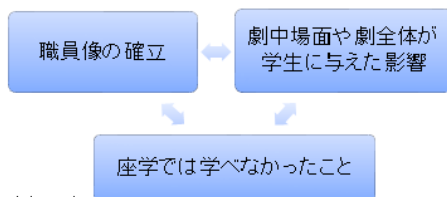
3. 結果

インタビュー内容から 32 概念を生成後，「制作過程」「劇中場面」「劇発表」の 3 つのコア・カテゴリとそれを構成する 7 つカテゴリ「自己形成」「感情の表出とコントロール」「周囲との意見対立や調整」「職員像の確立」「劇中場面や劇全体が学生に与えた影響」「座学では学べなかったこと」「劇作品そのものの効果」が生成された．コア・カテゴリとカテゴリの構成は以下 (1)～(3) の通りである．

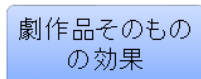
- (1) 制作過程
(自己の成長に関わる内容)



- (2) 劇中場面
(介護福祉士としての自覚に関わる内容)



- (3) 劇発表
(先輩から後輩への介護観伝達に関わる内容)



(コア・カテゴリ構成図)

3 つのコア・カテゴリ「制作過程」「劇中場面」「劇発表」

面」。「劇発表」は，介護実習劇の制作から発表までの経過を示したものとなった．以下に，その内容を「カテゴリ」【概念】分類を示して考察する．

3.1. 「制作過程」について

＜自己形成＞

【苦手なことへの挑戦】

【意見対立の経験】

【自己肯定感情の芽生え】

＜感情の表出とコントロール＞

【感情の表出】

【感情のコントロール】

【感動の共有】

＜周囲との意見対立や調整＞

【自分の意見を人に伝える力】

【周りを見る力】

【教員との意見交換によるモチベーションの強化】

【陰で動いてくれた仲間

【他学科に見せることに対する集団意識】

【相手と共に演じるという意識】

【劇を作り上げる目的意識の形成】

【陰で動いてくれた仲間

実習体験の共有から劇を作り上げるまでのクラス全体のグループワークに着目した「制作過程」では，「感情の表出とコントロール」「周囲との意見対立や調整」を繰り返し，劇を仕上げていく学生たちの様子が示された．また最終実習終了後の一か月間，クラス全員で一つの目標に向かう時間をもつことは，学生個人の「自己形成」にも影響を与えていることがわかった．

3.2. 「劇中場面」について

＜職員像の確立＞

【職員像の形成】

【現場で他の職員の視点を意識している】

【生活歴やその人らしさの視点で目の前の利用者を見る】

＜劇中場面や劇全体が学生に与えた影響＞

【多角的な視点の広がりを経験した】

【劇中場面の活用】

【介助の意味や根拠の発見】

【現場でのストレス耐性がついた】

【現場で他職種との考え方の違いを冷静に捉えられる】

【行事や勉強会で工夫する習慣がついた】

【役割意識】

【職業意欲の高まり】

<座学では学べなかったこと>

【教科書だけではわからないことが学べた】

【理論ではなく身体で納得する】

【教員の指摘を肯定的に受け止めるまでの葛藤】

【授業展開の記憶】

登場人物の台詞や介助場面など、劇に特有の要素が学生個人に与えた影響に着目した「劇中場面」では、介護福祉士としての自覚に関わる内容がみられた。「職員像の確立」は、自分が理想とする職員像の形成にとどまらず、現場で働く他の職員の存在や利用者の視点も組み入れて行われていた。「劇中場面や劇全体が学生に与えた影響」には、現状を冷静に見つめて現場での課題解決に努めていくといった内容がみられ、介助技術も同時に取り入れながら場面を作っていく介護実習劇の特徴は「座学では学べなかったこと」に分類された。

3.3. 「劇発表」について

<劇作品そのものの効果>

【劇を経験した先輩たちの存在】

【劇を観る後輩たちの存在】

【介護実習劇 DVD の視聴覚教材としての有用性】

【劇継続の願い】

最後に、介護実習劇をみる・みせるという劇上演の効果に着目したのが「劇発表」である。1年時に先輩の介護実習劇をみたことが劇制作の動機となり、今度は自分たちが後輩に向けて発信したいという思いに繋がっていく。これは毎年学園祭の時期に教科発表で劇上演を行う、A 専門学校の実践に特有の内容であるが、介護観を縦に繋いでいく必要性について考えるきっかけとなる点で今後考察を進めていきたい。また、学生の中には現場の職員との意見交換の場として介護実習劇の DVD 活用を提案する者もあり、一つの実習ストーリーを鑑賞することで、先輩・後輩間あるいは職員間での介護観伝達が可能になるのではないかと「劇作品そのものの効果」が示唆された。

4. 考察

以上の結果を通してみてきたのは、介護実習

劇には大きく分けて3つの視点「制作過程における仲間の視点」「劇中場面における登場人物たちの視点」「劇発表での先輩・後輩の視点」が関与しているという点である。「制作過程」において、学生が感情の揺らぎや意見の対立を経験したのは共に劇を作り上げる仲間の視点を意識している証拠であり、「劇中場面」においてはより顕著に「現場で他の職員の視点を意識している」「生活歴やその人らしさの視点で目の前の利用者を見る」「多角的な視点の広がりを経験した」「現場で他職種との考え方の違いを冷静に捉えられる」など、現場に関わる人の視点に関連した概念がみられた。また、「劇発表」を目的に行う劇制作には、始めから、「実習劇を鑑賞する者たちの視点を考えて作る」という前提が横たわっていた。

今回のインタビュー結果から、通常のレポートと口頭発表による事後指導が、学生自身の体験や課題に特化した実習の振り返りを促すのに対し、介護実習劇を活用した事後指導は、実習生としての自分に加え、クラスの仲間や現場に携わる人々の視点、さらには同じ職業を志す先輩・後輩の視点も同時に組み入れた、多角的な実習の振り返りを可能にしていることが明らかとなった。

今後は、この3つの視点がどのように相互作用しながら劇が作られていくのか、ファシリテーターとしての教員の役割を分析しつつ、台本の考察に入る予定である。

5. 今後の課題

劇作家平田オリザは、フィンランドの国語の教科書で「この物語を劇にしてみましよう」と最終的に演劇的な表現が求められる理由について、「インプット（感じ方）はバラバラでいいが、アウトプット（表現）は集団で行わなければならないという教育理念」がその根底にあると指摘している¹⁴⁾。この表現を借りるならば、介護実習劇は、「現場で実習を体験してきた学生たちのインプット（感じ方）がそれぞれ異なっているということを出発点とし、介護養成教育のまとめとして最終実習を振り返るときのアウトプット（表現）をクラス全員で行う試み」であると考えられる。つまり、アウトプットを個人ではなく集団で行うという点が、演劇を活用した事後指導の第一の特徴なのである。

しかしながら、演劇を活用した教育の中で、介

護実習劇がどこに位置づけられるのかといった質問に対しては、明確な答えが出ていないのが現状である。そのため、今後の台本分析で、演劇のもつどのような性質が実習の多角的な振り返りに役立っているのかを明らかにし、そこから演劇教育における介護実習劇の位置づけを考察していく必要があるだろう。

謝辞

本研究に協力いただきました A 専門学校卒業生の皆様に厚く御礼申し上げます。

付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所「共同研究プロジェクト」(D025)の助成を受けたものである。

引用文献

[1] 厚生労働省. “介護福祉士養成課程における教育内容等の見直しについて.
http://www.mhlw.go.jp/bunya/seikatsuhogo/dl/shakai-kaigo-yousei02_0001.pdf, (参照 2014-5-15).

[2] 川廷宗之. 介護教育方法論. 弘文堂, 2008, p.12~13.

[3] 市原浩美. 演習科目における創造性と感性を育む教育～介護劇を完成させる過程を通して～. 彰栄保育福祉専門学校紀要 25, p.45~63.

[4] 平田オリザ. 演劇はコミュニケーション教育に有効か? : コミュニケーションデザイン・センターにおける演劇教育. *Communication-Design*. 3, 2010, p.157.

参考文献

[1] JOHNNY SALDAÑA, *Ethnodrama : An Anthology of Reality Theatre*. Altamira Press, 2005.

[2] 高尾隆. インプロ教育即興演劇は創造性を育てるか?. フィルムアート社, 2006.

[3] 植上一希. 専門学校の教育とキャリア形成 進学・学び・卒業後. 大月書店, 2011.

[4] 日本演劇学会演劇と教育研究会. 演劇教育研究 第2号, 2009.

[5] 市原浩美. 専門学校における演劇的学習方法の可能性(その1)ー介護劇による学びが実践にどう生かされているのかの予備的研究ー. 第21回日本介護福祉学会大会発表報告要旨集 2013, p.62.

Abstract

In the field of Care worker training, specialists always put emphasis on the necessity of the students to make a direct correlation between the “theories” they learn in the classroom and the “practical work” they experience. However, it must be said that the concrete way of realizing it has not been enough investigated.

This study attempts to present a new method for realizing it through “Care Practice Play”, that is, the play or drama that second-year students of a care worker training school collaborate with each other in writing, based on their own experience in their practical work, and the students themselves play the roles. The present writer, lecturer of a care worker training school, has directed “Care Practice Play” for thirteen years and it is felt by experience that producing plays in cooperation is very effective in the guidance after “practical work”.

The ultimate aim of this study is to prove objectively the effectiveness of this method of employing theatrical plays, and this research begins on analyzing semi-structured interviews with 20 graduates who had experienced making “Care Practice Play” at the writer’s school. The results showed 3 core reflection places: « scenario production process », « rehearsal in the play scene », and « play announcement for all the students at school ». Moreover, 3 points of view concerned with each reflection place also appeared: « viewpoint of classmates in scenario production process », « viewpoint of Characters in the play scene », and « view point of audiences ». This investigation made it clear that through making “Care Practice Play”, the students were required to look back on their practice from different angles, and that leads, for example, to learn the control of feelings, to cultivate a spirit of patience or to find a mirror of the ideal care worker, etc...

After this, a next plan is to make detail investigation of the scripts of all the plays by analyzing how these 3 points are concerned and by comparing “Care Practice Play” with other drama education methods. It will reveal the validity of “Care Practice Play” which helps care worker students to combine Theory and Practice.

(受付日：2014年5月22日，受理日：2014年5月30日)

市原 浩美 (いちはら ひろみ)

現職：大妻女子大学大学院人間文化研究科人間生活科学専攻

児童発達臨床学専修 2年在学中

彰栄保育福祉専門学校専任講師

大妻女子大学短期大学部国文科卒。彰栄保育福祉専門学校保育科，介護福祉専攻科卒。